



「清教塾生たちは何故祈ったのか」

2024年2月

聖書科 清水 担

何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。
これが神に対するわたしたちの確信です。 (ヨハネの手紙一 5章14節)

清教学園の成り立ちを大谷美和子氏が小説として著している『青春輪舞』には、清教塾の生徒たちが、立ちは大変な大きな壁を目の当たりにした時、「みんなで真剣に祈るんや!」と励まし合う場面が描かれています。彼らはどうして祈ったのでしょうか。

大変な苦しみを経験し、それをもたらした戦争。「神なき教育は知恵ある悪魔をつくる」、「間違った教育の恐ろしさ」を味わった人々が、「夜だけでも…聖書と学校の勉強を並行して学ぼうと大阪長野教会(現在の河内長野教会)内に始めた清教塾には教会内外から生徒が集まりました。この塾で2年間学んだ生徒たちが「朝からこのように学べる中学校を!」と願ったのは、自分たちが受けた教育に感動したからでした。そして、自分たちだけでなく、自分の弟や妹たち、町や地域の人々にも共有したいという純朴な思いがありました。

資金集めのために、塾生たちは街頭募金やアルバイトを始めますが、中学校をつくるには「空恐ろしい金があるんや。」「できるわけない。」と反対されます。それは、塾で親身に教えてくれる先生や教会の牧師たちでした。膨大な経済的必要という現実だけではなく、誰よりも趣旨に賛同してくれると思っていた大人3名から反対されたことは塾生たちにどれほどのショックだったのでしょうか。

「そこまで反対されたら、仕方がない。」とあきらめるような状況で、塾生たちは声を掛け合い、祈るのです。「(神のみこころならば)きっとできる。」「みこころにかなった祈りはきかれる。」彼らが思い起したのは先生たちから何度も聞いていた励ましの言葉でした。

彼らが祈り続ける支えとなったのは、冒頭に記させていただいた聖書のみことばではないかと思えます。

**何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。
これが神に対するわたしたちの確信です。**

人の力ではかなわなくても、神さまはきっとかなえてくださる。清教塾生たちは心から信じ、祈りました。そして、この町にキリスト教主義の中学校がつくられることは、きっと神が喜んで認めてくださると確信していました。

やがて、かつて反対していた大人たちがこの祈りに加わります。涙と共に真摯に祈る塾の先生の姿に心打たれます。一人また一人とこのプロジェクトに心を捧げる人々が起こされ、中学校が始められました。この4月には76期の中学生を迎えようとしています。祈りを聞き、応えてくださる神の御名をたたえます。

祈りによって始められた清教学園では、生徒が祈る機会が与えられます。誰が聞いていなくても、一人で神に祈る時もあるでしょう。何もしないで、ただ祈っていればよいというわけではありません。自分のできること・なすべきことを精一杯した上で、神に祈るのです。自分の祈りは「神のみこころにかなう」だろうかと思いつきながら、そして、神を信頼し、きっと聞き届けてくださると信じて祈るのです。あの時、清教塾生の祈りを聞いてくださった神様は今も私たちの祈りに聞き、応えてくださいます。

